

ホゾ穴と正面向き 検証・首里城大龍柱 復元

安里 進

□下□

永津氏は、昭和修理の大龍柱の向き変更で、吡形では一龍柱上部が右側面の場合、トグロ巻き部は正面の「はず」と主張するが、これは西村氏の指摘にも事実にも反している。

欠損部にホゾ穴なし 往時の姿を研究と議論で

修理の竣工前に撮影したもので、図1④の阿形龍柱と同じ写真からの拡大である。トグロ巻き部の展開は平成大龍柱と一致しており、図1④と写真1がトグロ巻き部の背面であることは間違いない。

回転を誤認

次に、永津氏の説明をもとに作成したという昭和修理とに作成したという昭和修理

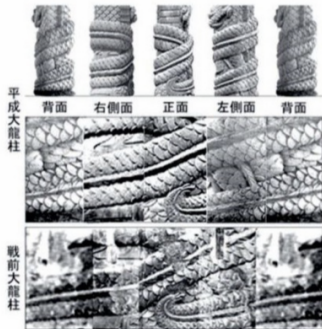


図3：平成と戦前の吡形大龍柱のトグロ巻き展開図。戦前大龍柱の右側面・正面・左側面は沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵（鎌倉芳太郎撮影）。背面は東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵

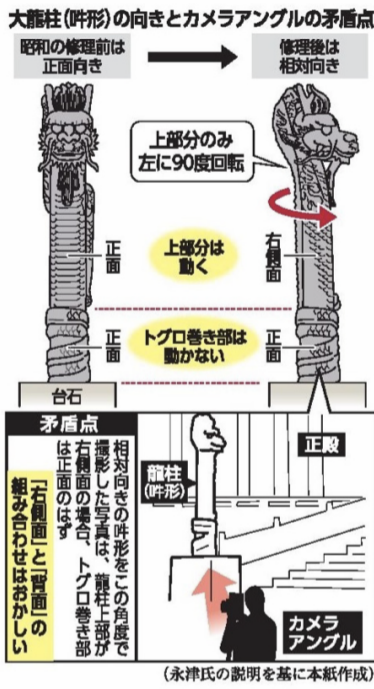


図4：永津氏の説明による昭和修理の回転

「正面」と注記しているが、明らかにした大龍柱の回転における大龍柱（吡形）はトグロ巻き部の背面が取り回しされている。つまり永津氏は、西村氏上半分は彫刻が欠損した中に白い石灰様のもので埋め



写真1：昭和修理竣工前の吡形大龍柱とトグロ巻き部背面の拡大。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵

たカスガイ溝（縦溝）がある。溝の端にある深い穴がない。写真1のカスガイ溝も、戦前大龍柱の背面にはホゾ穴がないことを示している。カスガイ溝には銅製カスガイの上部と下部を固定するもので盛り上げて補修し、ウロコを復元しているの

「琉球建築」の写真では、下部の欠損部分を石灰様のもので盛り上げて補修し、ウロコを復元しているの

次に、下部背面にはホゾ穴がないことを説明する。私がSCI博6と名付けた17世紀の古い大龍柱残欠では、欄干に密着・固定させるためにトグロ巻き部背面を無彫刻の平坦にしたうえで、欄干の地盤石や羽目石のホゾを嵌め込む深さ4寸

大龍柱に連結する欄干の羽目石や親柱は、ホゾの突出が約3寸でこれを嵌め込むホゾ穴の深さは約4寸あり、写真1の欠損部分にはカスガイ溝が見えるので、欠損部分の深さは彫刻面から2・0寸を超えることがない。表面部分が剥落したことが分かる。先人の生き様に学ぶためだ。しかし、過去の事実を説明することは容易ではない。かといって現代の私

写真1の欠損部にホゾ穴があるとすれば、カスガイ溝よりも深く大きなホゾ穴が開けられていたはずだが、その形跡は乏しい。欠損部にはホゾ穴はなかったと私は考えている。

最後に、大龍柱復元では学術的議論がなせ大切なことを述べたい。大龍柱は、国指定史跡に文化財として復元する正殿の一部である。文化財の復元は、史実に基づいて往時の姿による復元をめざす事業である。先人の生き様に学ぶためだ。しかし、過去の事実を説明することは容易ではない。かといって現代の私

先人の生き様